

「国際浅草学プロジェクト発足にあたって」

ウィーン大学文献文化学部教授・同大学東アジア研究所長

セップ・リンハルト

本日は、国際浅草学会並びに国際浅草学プロジェクトの発足にあたり、関係者の皆様のご努力に感謝するとともに、なによりも先ずお祝いの言葉を申し上げたいと思います。皆様、本当におめでとうございます。私も誠に嬉しく存じます。

この国際浅草学プロジェクトは、一種の地域共同研究プロジェクトです。私は、地域共同研究プロジェクトを通じて学問とはいかなるものかを知り、地域共同研究で学者としての洗礼を受けました。地域共同研究の基本的な方法論は、大学院生であり、研究者の卵であった当時の私にとって、母乳のように貴重なものであったといえるでしょう。ここで私が過去体験いたしました地域共同研究について、少し具体的に説明させていただきます。

大きく見れば、我々の日本学も一種の地域研究です。アメリカでは戦後間もなく、この種の研究分野を指してエーリア・スタディーズと呼ぶようになりました。

私のウィーン大学院の先生であったアレキサンダー・スラビックは、民族学上の日本研究では、一つの地域を学際的に共同研究することが非常に重要であると確信しておりました。彼は、日本で戦後一時期活発に、様々な地域共同研究プロジェクトを行った九学会連合の方法を模倣し実践しました。私が大学に入学したのは1963年でしたが、その当時は今日のように、誰でも簡単に日本へ行くことができませんでした。スラビック先生でさえ来日できたのは、彼の長い研究生生活途上で、わずか3回のみでした。そういう状況から、スラビック先生は我々学生をウィーン市近郊の村へ連れていき、そこで日本の地域調査のための予行練習をさせました。そしてついに念願かなって、1968年から69年にかけて、九州の阿蘇地方で、先生と助手のクライナー、そして我々大学院生数人が地域共同研究を実施することになりました。当時のドイツ語圏の日本学界では、まだ文献を読む事が主で、日本での実地調査は全く行われておりませんでした。したがって、1974年、ドイツの日本学会での阿蘇調査についての発表は、日本研究者に大きな衝撃を与えました。私はその後も、ウィーン市ルドルフスハイム区と東京都墨田区の比較地域共同研究を行いました。そのときのテーマは、両地域に居住する老人の生活比較調査でしたが、日本人が十名とオーストリアからは二名の研究者が参加しました。

その後は私も、主として文献を読む「安楽いす学者」になりましたが、この機会に、浅草地区について「また共同研究ができればいいな」と懐かしさも加えて、其の実現を心から願ってやみません。

本題に入ります。私の浅草に関する興味は、過去20年間の主となる研究テーマ「日本の娯楽の歴史」に由来しております。若いころの私は、先ほど申し上げました通り、「年寄り」の研究をしておりました。しかし自分でも年をとるにしたがって、「年寄り」の研究が面白くなってしまい、そこで「日本の娯楽の歴史」を新たな研究テーマにいたしました。江戸時代から現在

までの娯楽の歴史で、浅草がいかに重要な位置を占めていたかは、周知の事ですから、ここで改めて説明する必要はないでしょう。それよりも、私が浅草のどの側面に興味をもっているのかを、簡単に述べさせていただきます。

私は90年代を通じて、主として「拳遊び」の研究をし、それをまとめて角川出版社から『拳の文化史』という本を出しました。この拳の研究上、浅草についての多くの文献を読む機会に恵まれ、現在でも「拳遊び」が浅草に残っていることを知りました。1996年、私が始めて現存の拳遊びの実演を見たのも、やはり浅草のある料亭でした。

さらに、拳遊びと関係の深い「チョンキナ踊り」について調べると、やはり浅草の名前が何回も現れました。

尚、まだ始めたばかりですが、私は「投扇興遊び」の研究もしております。投扇興遊びは一時（江戸）非常に盛んでしたが、いつの間にかこの伝統文化の座敷芸に属している遊びも消えてしまいました。ところが最近、やはり浅草からその遊びの復活運動が起こり、投扇興はまた除々に遊ばれるようになってまいりました。

さて、これらのいわゆる「お座敷芸」と並行して、私は「日本の流行歌・歌謡曲の歴史」にも興味を持って研究しておりますが、以前、歌謡曲は近代日本大衆文化の一大要素であり、伝統的遊び文化とは何の関係がないと思っていたことが、間違いであるとわかりました。伝統的文化のお座敷芸の継承者は、なんといても芸者さんです。そして太平洋戦争前に日本で一番人気のあった歌手は、松井須磨子のようなインテリ女優ではなく、やはり二人の芸者さんでした：小唄勝太郎と浅草市丸です。

浅草市丸は、1906年、長野県松本市で十二人という子沢山の家に生まれ、大変貧しい少女時代を送り、十四歳から浅間でお酌として働き、十九歳で上京し浅草で、その美貌と美声で一躍人気芸者になりました。そして1931年には『花嫁東京』で、流行歌手としてデビューしました。当時彼女はすでに25歳で、歌手として決して若くはありませんでした。市丸がなぜ歌手になったと申しますと、浅間でお酌をしていた頃、お客に歌えといわれても歌えなくて恥ずかしかったため、芸者になってから本格的に勉強したのが、そのきっかけになったようです。東京で最高の先生に付いて真剣に学んだかいがあつて、ビクター社にスカウトされ、歌謡曲界にはいりました。1930年代は、芸者歌手の時代であったことも、市丸の歌手としてのキャリアに幸いました。しかし戦前の日本人には、芸者の歌がなぜあんなに受けたのでしょうか。小唄勝太郎と浅草市丸はビクター社のスパースターになりましたが、その他にも色々な芸者歌手が活躍しました。葎町の芸者・二三吉（後の藤本二三吉）が最初で、コロムビアからは赤坂小梅、豆千代、ポリドールからは新橋喜代三、浅草メ香、ニッソーからは美ち奴、日本橋きみ栄ら、続々と芸者出身のレコード歌手がデビューしました。市丸は、こうした後輩に遅れを取るまいとして、同郷の中山晋平が新民謡として作曲した『天龍下れば』をなんとしてもヒットさせようと、ラジオやステージでは必ず『天龍下れば』を歌いました。その執念はついに大ヒットに結びつき、ビクターの看板歌手としての地位を確立しました。市丸の人気は、歌手としてのレコードやラジオにとど

まらず、グラビアや広告、美人画のモデルにも起用されました。そこで歌手業に専念するため、芸者をやめ、柳橋に邸宅を構え、浅草を離れました。この昭和10年前後の歌謡曲界を指してマスコミは、人気を二分した勝太郎との「市勝時代」と呼び、作詞家の長田幹彦には「情の勝太郎と智の市丸」と言わしめました。市丸は戦中戦後もその活動を続け、1997年九十一歳で亡くなるまでに、なんと千七百という歌謡曲をレコード化しました。

私は、本日新発足いたしました浅草学会の一員として、この浅草が生んだ偉大な歌手存在を中心に、浅草の芸者歌手について、さらに深い研究を続けてまいる所存です。ご清聴ありがとうございました。